

福島の 児童文学者14

久米正雄

郡山市内の男子中学生に毎年授与される文芸賞として久米賞がある。久米賞とは、郡山出身の作家・久米正雄に因んで設立された賞であるが、久米正雄とはどのような人であろうか。

久米正雄（くめ・まさお）、劇作家・俳人、そして大正ロマンティストの代表的作家。明治二十四年十一月二十三日、長野県小県郡（ちいさがたぐん）上田町に生まれる。正雄七歳の時に、小学校長をしていた父が校舎と御真影を焼失した責任をとって割腹自殺を遂げたため、一家はやむなく母の父・立岩一郎が住む安積郡桑野村開成山に、明治三十一年に移住する。その年正雄は、村の開成小学校一年生に入学。同三十五年に、読・書・算術・作文・口頭諮問等の試験を受け、郡山第一尋常高等小学校（金透小学校）に入学し、三年生の時に県立安積中学（安積高校）に合格、同四十三年三月に八番の成績で卒業。同年九月推薦で第一高等学校一部乙（英文科）に入学、大正二年九月東京帝国大学（東大）英文科に入学。

東大在学中に、社会劇「牛乳屋の兄弟」を処女作として『新思想』に発表、認められ当時有名な有楽座で上演、好評を得一躍劇作家としてデビューする。その後夏目漱石に師事、大正五年に初めて小説『父の死』を発表、その後も力作を書き順調に作家としての地位を確立。

昭和二十七年二月二十九日脳溢血で倒れ、そのまま意識が戻らず、三月一日午前零時三十分死に死去。享年六十一歳であった。

〔久米と福島〕

母幸子の父・立岩一郎が開成山に住み、中條政恒（宮本百合子の祖父）と共に安積開拓に従事、父・由太郎が福島県令・安場保和の要請で「小学教訓講習所（福島師範学校の前身）」に訓導兼教場監事（校長）として着任するなど、福島とは深い関わりがあった。母や兄弟と移り住んでからは、言葉の問題や服装で苛められたよう、新開地の農民階級の中に在っては、正雄の家はやはりブルジョワ階級・知識階級に該当するものであった。しかし、中條家の近親者が同級生という事もあり、正雄自身はすぐにその中に溶け込んだ。開成山の灌漑用の池で遊び、姉の雑誌『文藝倶楽部』『少年世界』『太陽』や『少女歴史物語』を読む少年時代であった。

安積中学に入学した頃は、絵画やテ

ニスや野球に熱中していたが、近視のせいで下手だったと本人が書いている。三年の時に、教頭西村雪人や教師田辺三貝らの影響で俳句を始め、熱中し、五年の後半からは学業や運動そっちのけで新傾向派の俳句に興味を持ち、当時郡山の俳壇をリードした「郡峰吟社」の句会に参加したり、俳壇に句を発表していた。俳号を三汀と号し、小さい時遊んだ三つの池からとったといわれている。一高に入学してからも、河東碧梧桐を師と仰いで俳人たらんとしたが、二年の頃から当時勃興してきた新劇にひかれ、劇作家に志を変え、俳句をやめる。

劇作家としてのデビュー作「牛乳屋の兄弟」のモデルは、開成山にあった石井牧場であり、その他にも正雄の作品には郷土を題材にしたものが多い。

「受験生の手記」（後に単行本『学生時代』収録）や戯曲「阿武隈心中」「三浦製糸場主」「地藏教由来」、小説『流行火事』などである。

〔童話作家としての久米〕

新進作家として活躍していた大正八年頃から、久米は雑誌『赤い鳥』に十編の童話を書いている。

雑誌『赤い鳥』は、大正七年に鈴木三重吉により創刊された子ども向けの雑誌であるが、三重吉の要請にに応じて、芥川龍之介、泉鏡花、森鷗外、島崎藤村らが大人のための創作（小説・劇・

詩）活動が専門である作家、詩人たちが童話や童謡を書いており、久米正雄もその中の一人であった。

初めて書いた創作童話は、「熊」という題名で、大正八年一月号の『赤い鳥』に掲載されている。唐黍（もろこし）畑で熊と出会った行商人の話・熊と牡牛との喧嘩の話からなり、熊の臆病さと強さを子供向けに書いている。この話は、現在でも『北海道児童文学全集』に収録され読まれている。他に、「うそ」（八年三月）、「落雷」（同七月）、「泥棒」（同十月）、「あひる」（九年二月）、「名人源呢」（同五月）、「弓試合」（同六月）、「セツサリーの白牛」（同九月）、「支那船」（十年一月）、「大泥棒」（同九月）を『赤い鳥』に書いている。ほかに児童向けの立志小説「青空に微笑む」（昭和九年九月『少年倶楽部』）も書いている。

この時代は、文壇や詩壇のほとんどの代表的作家・詩人が真剣に新しき児童文学の開花について熱中し、それを実践した。これは、日本文学史上初めての事であり、児童文学の黄金時代であったと言われている。久米正雄も、その担い手の一人であった。

参考文献

雑誌『赤い鳥』複製版
『赤い鳥研究』（小峰書店）
『久米正雄全集』（本の友社）